

今週のメニュー

トピックス

雨音に誘われて - 塩ビ製のレインブーツ -

随想

塩化ビニル管・継手の歴史(3)

塩化ビニル管・継手協会 総務部長 石崎 光一

編集後記

トピックス

雨音に誘われて - 塩ビ製のレインブーツ -

雨が多いこの時期、巷ではファッションナブルなレインブーツを履いた女性たちを目にします。

ファッションナブルなレインブーツはイタリア製など輸入品が火付け役でブランド品としても販売されています。

ヨーロッパからの輸入品は高価だということもあり、最近では日本でも生産されるようになり販売されています。

塩ビのレインブーツの特徴は塩ビならではの革のような質感や、花柄・ヒョウ柄など多彩なデザイン。筒を細くするなど、ファッション性を強調して従来の地味なイメージを一新しています。雨の日だけでなく晴れた日にも履けるデザインが人気ようです。

今回紹介するのは『「雨の日が好きになる。雨音に誘われて」- 雨の音を聞いていると、心が癒される - 』。そんなコンセプトから名前がついた塩ビレインブーツの amane (アマネ)。

amane には、ローヒールとハイヒールの2タイプがあります。エナメル調の艶やかな塩ビ素材の下に浮き出す柄は、レトロな幾何学模様、雨粒をイメージした水玉模様、レース柄やラメ入りまで多彩です。特徴はハイヒールタイプのサイドファスナーです。一般的にファスナーがないものが多く、一度足を入れると脱ぐ時に苦労します。



amane シリーズ

サイドファスナーの取付け部分をカットし、最後にミシンでファスナーを縫いつけますが、技術的には、この縫製工程の改良が最も苦心されたらしく、後から縫いつけるために、既存のミシンと裁断機に改良を加えて試行錯誤をして特殊な機器を開発したとのこと。サイドファスナーをつけることによって履きやすさと細身でエレガントなシルエットを実現することが出来たそうです。(了)

PVCニュース(JPEC)に、アキレス(株)の取材記事を掲載しています。

<http://www.pvc.or.jp/news/69-7.html>

塩化ビニル管・継手の歴史（3）

塩化ビニル管・継手協会 総務部長 石崎 光一

シリーズも第3回目となり、塩化ビニル管の成長と転換の時期の話をさせていただきます。特にこの時期は下水道用途への拡大を図りました。

3．成長の10年

昭和39年（1964年）からの10年間は、わが国の高度成長を加速する時期にあたり、この年の東京オリンピックの開催を皮切りに、塩ビ管の需要が沸騰する時期となりました。

ただし、好景気ばかりは続かず、オリンピック景気で沸いた翌年には早くもその反動で日本経済は大きな不況への落ち込みもありました。

この時期を経て、再び日本経済の高度成長の入り口に立ち始め、それにつれて塩ビ管業界の需要も急角度で回復するようになりました。特に住宅ローン制度の創設による住宅建設、宅地造成が相乗効果を生んで塩ビ管の需要増を呼び込むこととなりました。

4．転換期の10年

昭和49年（1974年）の前半はオイルショックの影響が色濃く残り、需要が旺盛で品不足気味となりました。しかし後半になると状況は急変しました。

設備を増強して最大限の生産から、需要が落ち込み需要バランスは大きく崩れました。塩ビ管業界のこのような状況には、需要者側にも大きな不安感を与えました。

特に東京都下水道局が2年間にわたる各種実験の結果、塩ビ管が下水道管として採用可能というお墨付きをとったにも拘わらず、数量と価格の不安定要因が問題となって採用が一時棚上げとなりました。しかし、昭和49年（1974年）6月には（社）日本下水道協会規格（JSWAS K-1）として成案化されました。その後の下水道分野での著しい普及拡大の足跡を見れば、一大転機となる瞬間でありました。

昭和53年（1978年）になると昭和51年（1976年）に立てた需要見通しが何かの間違いかと思われるほど、需要は活発となりました。この主な要因のひとつとしては、東京サミットを控えて公共事業拡大による下水道、農業用水など大口径分野の需要が増加したことが挙げられます。

この53年には、1月に伊豆大島近海地震、7月に宮城県沖地震の二つの大きな地震が起きました。特に宮城県沖地震はM7.4規模でかなり被害を出しました。現地に調査団を派遣して調べたところ、水道管路におけるゴム輪形接合は接着接合より地震に強いことが判明しました。一方、安定供給を図るうえで、耐震工法の研究が強く要請されました。

塩ビ管の大口径化への鍵を握る国、県道への下水道管理設を目指して、道路下埋設許可を得るための動きがスタートしました。建設省外郭団体の（財）国土開発技術研究センター（現国土技術研究センター）に下水道用硬質塩ビ管の埋設実験を委託した結果、センターが事務局となって下水道界の技術者からなる委員会が組織され、昭和53年（1978年）になって道路下埋設実験が実施されることとなりました。

こうした中で、下水道分野における道路下埋設実験は予定通り着々とすすめられ、昭和55年(1980年)の10月の最終委員会で「国道下埋設可能」という待望の結論に至りました。

また、水道用ゴム輪形塩ビ管と継手の規格は、4年間かかって昭和56年(1981年)に制定されました。

(財)国土開発技術研究センターで行われていた道路下埋設実験の報告では、安全性を確保するためにはさらに施工基準を作成することが必要となりました。このため再度同センターで施工基準作成が審議され、水道分野では水道用ゴム輪形塩化ビニル管と継手に関して5つの(社)日本水道協会規格JWWA(K127~K131)が制定され、ゴム輪形接合への体制が完成しました。



道路下埋設実験

昭和58年(1982年)3月需要開拓面では、(財)国土開発技術研究センターが行っていた2年間にわたる各種試験の結果を「下水道用硬質塩化ビニル管道路埋設指針」として発表しました。先に報告された「道路下埋設に関する研究報告書」に次ぐもので道路下埋設に関する施工資料の完成となりました。これを受けて建設省道路局は各地方建設局に「下水道用硬質塩化ビニル管に関する占用の取り扱いについての対応方針(案)」を出しました。(続く)

前回の塩化ビニル管・継手の歴史(2)は、下記からご覧頂けます。

http://www.vec.gr.jp/mag/225/mag_225.pdf

編集後記

今週に入り、東京では雨量も増え、気温・湿度とも上昇し、霪雨(ばいう)らしくなってきました。それまでは、曇り空でしたが雨量は少なく、梅雨入り宣言は間違いではと思っておりました。

この時期の花と言えば紫陽花、テレビや新聞に名所や見頃を紹介する記事が多く出ています。

つい最近、故石原裕次郎さんの23回忌の法要が、この7月5日に国立競技場の中に建てたお寺で営まれるとの記事を見ました。紫陽花がお好きだったようで法要時にはいっぱい飾られるようです。裕ちゃんには今も幅広い世代に多くのファンがいるようで、当日の参列者はすごい人になるのでしょうか。それにしても国立競技場のフィールドにお寺を建てるのは豪気ですね。(可)



Photo : <http://www.s-hoshino.com/>

関連リンク

[メールマガジンバックナンバー](#)

[メールマガジン登録・解除](#)



編集責任者 事務局長 東 幸次

東京都中央区新川 1-4-1

TEL 03-3297-5601

FAX 03-3297-5783

URL <http://www.vec.gr.jp>

E-MAIL info@vec.gr.jp
